

復興における文化を介したコミットメントの重要性  
—東日本大震災後の千葉県香取市佐原の大祭の事例から—  
Importance of Commitment through Culture during Restoration  
—Casestudy on the Festival of Sawara after 2011 Tohoku Earthquake—

学籍番号	47096816
氏名	大森有希子 (Akiko, Omori)
指導教員	清水 亮 准教授

### 1. 研究の背景・関心

2011年3月11日の東日本大震災（以下、「3.11」）より3年以上が経過したが、震災の被害はまだ完全には復旧・復興されていない状態にある。

震災の被害を受けて、多くの人々が他所へ移住する地域がある一方で、移住せずに留まる人々が多い地域もある。なぜ震災後に、ある地域における移住と定住という、人々の異なる態度がみられるのか。1つの要因として、人々の地域コミュニティとの関わり方があるのではないかと考えられる。

### 2. 研究の目的

本研究では、3.11の被害を受けた地域における人々のコミュニティとの関わり方について、実態を調査・分析する。また、その関わりが、特に3.11後の復旧・復興において、どのように展開・機能したかを考察することを目的とする。

### 3. 調査対象地

3.11の被災地の1つである千葉県香取市佐原を、本研究の対象地とする。佐原は、北部に利根川流域を持つ地盤の弱い土地条件だが、利根川以南には伊能忠敬の旧家や江戸時代の舟運によって栄えた商家町が多

く残る。

佐原では、震災による主な被害として、液状化現象と建物への影響（屋根瓦の崩落等）が発生した。甚大な被害にもかかわらず、佐原から他所へ移住する人は少なかった。3.11後、佐原に住む人々の過半数が、「地域コミュニティのつながり、助け合いの大切さ」又は「歴史的町並みの大切さ」を改めて実感したという（東京大学都市持続再生研究センター2012:070）。これは具体的に何を意味するのであろうか。

佐原には、「佐原の大祭」、重要伝統的建造物（以下、「重伝建」）が立ち並ぶ街並み、佐原の中央を南北に流れる小野川の江戸風景観、に代表される文化的資産がある。祭は特に、地縁の結びつきにより、伝統やしきたりが継承されており、佐原のコミュニティづくりに結びついているといえる。

### 4. 調査方法

市の統計課・市街地政策課・都市整備課、ネット情報、文献、などによる情報収集のほか、市民説明会の傍聴、佐原住民へのアンケート調査、ヒアリング調査等を行う。

#### 5.1. 「小野川と佐原の町並みを考える会」

「考える会」は、1996年に重伝建登録された佐原の町並みを、重伝建登録前の1991

写真1 修復前, 修復後佐原の町並み



(出典: NPO 法人小野川と佐原の町並みを考える会「佐原の町並み」)

年から、保存する取り組みを続けている。

3.11により、重伝建は崩落などの甚大な被害を受けた。再建には多額の資金が必要であったが、住民の重伝建への思いに鼓舞され、「考える会」が中心となって行政や海外のファンドに重伝建再建のための資金を要請した。それらの資金支援のもと、震災の被害から迅速に再建を実施した。

高橋理事長は、震災前から「考える会」がパイプ役となり行政に働きかける体制があったため、震災後も佐原の町は守られた、という。

## 5.2 「女将さん会」

2004年に、市の観光課主導で重伝建の商家に住む女将さんが集められ、「女将さん会」が発足した。各商家に眠るひな人形を発掘して観光客に公開するなど、佐原の伝統を生かし、継続的に佐原の魅力を伝えている。

平塚さんは、3.11後、重伝建地区の被害を目の当たりにして、茫然自失した。しかし、「考える会」の人々を筆頭に重伝建の再建が動き出し、また「女将さん会」の精神的つながりを通じて、佐原を復興しなくては、という思いになったという。

3.11後、「女将さん会」では、崩落した屋根瓦を裁断してお守り商品にするなどの企画を生み出した。こうした取り組みの背景

には、過去から続く佐原の伝統文化を、そして佐原の町を、自分達で守らねばという強い思いがあったと平塚さんは話す。

## 6. 佐原の祭

5.において、佐原の文化や伝統に関わる2つの組織の活動及び3.11後の振る舞いを整理したが、高橋理事長も、平塚さんも、佐原にとって祭は一番なくてはならないものであると語る。

夏と秋の年2回開催する、「佐原の大祭」の内容を以下にまとめる。

### 6.1. 祭の概要

佐原には、16世紀の天正年間を起源とする（佐原教育委員会 2010）、八坂神社を氏神とする本宿（小野川以東）による夏祭と、諏訪神社を氏神とする新宿（小野川以西）による秋祭がある。祝祭の基盤に伝統を据え、核となる伝統保持の社会集団をもって運用される「伝統的都市祝祭」である（松平 1994 : 72）。

表1：佐原の大祭の概要

	夏祭	秋祭
開催地域	本宿（小野川以東）	新宿（小野川以西）
祭の開催時期	7月10日以降の金・土・日曜日の3日間、10時～22時	10月第2土曜日を中日とする金・土・日曜日の3日間、10時～22時
山車の数	10台（各地区1台ずつ、全10地区）	15台（各地区1台ずつ、全15地区）

（香取市観光課チラシ（2014）をもとに作成）

表 2：祭の進行表（2014 年夏祭の例）

2014年7月11日（金）～13日（日）の夏祭の進行		
日程	時間帯	内容
7月11日（金）	10時～	山車乱曳き
	随時	山村会館前での字廻し
	随時	各山車前・本宿随所で手踊り披露
	22時頃	山車を蔵に納める
7月12日（土）	10時～	山車乱曳き
	17時頃	佐原東部の香取神宮第一鳥居前から香取神宮入口交差点前までの間に山車10台整列
	18時～	提灯へ灯入れ・山車前で各地区総踊り
	18時20分頃	香取神宮入り口交差点前で通し砂切、の字廻し
	22時頃	山車を蔵に納める
	随時	各山車前、本宿随所で手踊りの披露
7月13日（日）	10時～	山車乱曳き
	15時～	八坂神社から本宿各地区へ神輿の神幸
	随時	山村会館前での字廻し
	随時	各山車前、本宿随所で手踊りの披露
	22時頃	山車を蔵に納める

（香取市観光課チラシ（2014）をもとに作成）

戦後、多くの地域で町内会制度が崩壊し都市に変化しても、佐原は商人の町で、地縁の絆の町内会が今も健在である。仕事と生活の場が一体となっている、200年続く商家が今も数多くあることが、地縁の絆を保つ1つの要因である。

## 6.2. 祭の特徴

佐原の祭で曳き回される山車は、山車の人形や箱の彫り物に江戸の名人の技が映える、芸術的で貴重な文化遺産となっている。山車の曳き回しに伴う佐原囃子は50曲以上を誇り、江戸の名士が振り付けた踊りなど、佐原の祭は伝統文化を今に伝えている。

夏祭の本宿と秋祭の新宿は、互いに対抗意識を持ち、また本宿と新宿の各地域内でも、地区同士の対抗意識がある。雨が降って祭が中止になると、その祭の主催でない人々は主催する人々を嘲って喜ぶほどであるという。

この対抗意識がもととなって、山車の曳き回しや囃子をはじめ、毎回斬新な創意工夫が施される。これが佐原の祭の「粋」と「洒落」として、祭の魅力となっている。

## 6.3. 祭の運営組織

佐原の祭には、完全に縦割型の伝統的な運営組織があることが、祭を継承する有効なシステムであるという。祭の運営を担うのは男性のみで、祭本番で山車を曳き回す若衆（20代～30代）とその代表である頭、祭の運営を指揮する当役（40代）とその代表である当役長（40代）が主に祭を統括する。当役長は、町内の地区順に、3年の任期ごとに町内の信任によって選ばれ、実質的な祭の最高責任者を務める。

祭の運営組織は佐原のコミュニティに浸透しており、当役長や頭などは祭以外の場でも住民の信頼を寄せられている。また、祭を通して、子供や若者は学校や家庭以外の場で大人から躰をされて育つため、祭が人を育て、人々の繋がりを強固にしている。

## 6.4. 住民の祭への想い

祭当日、女性は法被と振り鉢巻きを着て、山車の周囲で舞と掛け声を披露し、子供は山車をから伸びる綱を引くなど、老若男女問わず、佐原の人々は祭に関わる。普段作れない人間関係を祭は一気に作るという。

2014年の夏祭は3日間で34万人の観光客を動員し、市外の佐原出身者も祭のために帰郷してくる。

佐原の人々は、祭とは関係のない場面であっても、人が集まると必ず祭の話になる、というほど祭好きであり、祭が生活の一部となっている。

## 6.5. 祭が3.11の復興に果たした役割

3.11の直後は日本全国で催事を自粛する気運が高まっていたが、佐原の人々の「何があっても祭だけはやる」という気持ちがその年の夏祭の催行に繋がった。

具体的には、3.11の影響により小野川兩岸の道路は液状化被害が甚大であったが、

祭の山車を通せるよう復旧工事を早めた。小林さんは、「祭に支えられている佐原を何とかしなければという人々の心の強さが、震災後の復興にみごと花開いたと思う」と語っていた。

## 7. 考察

3.11 で地域が危機に陥った時に、佐原の人々の多くは、生活よりも祭であった。「祭がなくては虚しい」という想いは、祭が人生の生きがいとなる価値観が佐原の人々にあるからである。

佐原の祭を契機として、佐原という空間における、共通の記憶が人々に共有される。すなわち、「集合的記憶」によって人々の関係が結ばれ、たとえ突然の災害に遭遇しても、祭を通してお互いによく見知っているからこそ、すぐに声をかけ合える。祭の役割をもつ人間に信頼が集まり、町の意味決定が速やかに進む。

復興の原動力となったものは、佐原に住む人々の地域への愛着が根本にある。祭を通じた関係性により、人々は自分の居場所を見出すことができ、アイデンティティがそこに根差すのである。

桑子敏雄は、「蓄積された文化的意味をひそめる空間」(桑子 2009:9)として、「空間の履歴」という概念を提示している。佐原の人々には、「場」、「集合的記憶」、信頼の関係性、といったものがこの「空間の履歴」の中にあり、コアの住み手である「わたし」と環境を繋いでいる。祭などに主体的に参加することで、「集合的記憶」、「空間の履歴」が重層化される。それが住民の地域との関係を維持、強化するのである。

佐原の祭をはじめとする、文化を通じた人々の地域コミュニティとの繋がりを、「文

化を介したコミットメント」と呼びたい。佐原の住民が祭を介して、その土地との関わりが密接であるからこそ、佐原には「文化を介したコミットメント」があると提言する。この「文化を介したコミットメント」が佐原の人々をその地に留まらせ、それが復旧・復興の推進にも繋がった。

佐原の場合は、祭の前提に防災という目的があったのではなく、既存の祭のシステムが、災害への対応という新たな目的にも適合していったという点に注目したい。

突然の災害に対する備えは、事後より事前の対策が大切である。佐原の事例に基づき、災害前から、コミュニティの「空間の履歴」を前提とした「文化を介したコミットメント」による、コミュニティの強化が重要であることがわかった。

### 参考文献：

アルヴァックス/小関藤一郎、『集合的履歴』、2010  
桑子敏雄、『環境の哲学』、講談社、2002／——  
一、『日本文化の環境学』、筑摩書房、2008／——  
——、『日本文化の哲学』、講談社、2002／——  
一、『空間の履歴』東信堂、2009。

松平誠、『都市祝祭の社会学』、有斐閣、1994

佐原市教育委員会、1996。

東京大学都市持続再生研究センター、『震災後の底力と町並み再生の原動力』2012。

### ヒアリング：

高橋氏 2014年5月4日／小林氏、円城寺氏、吉田氏 2014年5月4日、17日、24日、6月17日、6月22日、7月13日／平塚智子氏 2014年4月13日、5月5日、5月25日／平塚丈泰氏 2014年5月25日／小林氏 2014年5月25日／円城寺氏 2014年5月25日